

建築と空間象徴

野口英雄*

A Study on Symbolism in Hindu Architecture

Hideo NOGUCHI*

Hindu architecture, in addition to its functional aspects, is an expression of Hindu cosmology. *Mānasāra Vāstuśāstra*, an ancient treatise on Hindu architecture, expounds four norms through which this cosmology is expressed: (1) a system of measurement, (2) a series of graphic patterns, (3) a range of component types of architecture, and (4) the specification of construction materials. Each of these is understood to represent a certain phase of the cosmos. In Southeast Asia, as in India, these

norms historically were applied to architecture, as well as to literature. Closer examination of selected historic monuments in Southeast Asia reveals, however, a wider variety of architectural plans, probably due to the influence of the more flexible indigenous concept of space.

These historic monuments of the Region are regarded as important cultural heritages and are being restored in the overall framework of the development plans of the area.

I 本論の目的

建築はもろもろの日常的な機能充足のための道具でありながら、目にみえない世界観と意味をもたう、いわば象徴の空間表現の働きをもつ。この空間象徴のメカニズムを解明し、東南アジアのいくつかの国における建築にあらわれる空間象徴の諸相を見直し、あわせてこれら地域の開発に向けられる建築と象徴空間の役割を再考したい。

II 建築をめぐる空間象徴のメカニズム

建築は物理的「体」、物体に支えられている。この物体としての建築には、外力に抗し

て自立し、われわれの生命を守り、安全で快適な環境を作ることが期待されている。この限りでは、文化の違いと建築の表現形式のかわりを説明することはほとんどできない。次に、建築が何かに役だつ、すなわち機能的な側面からみると、例えば住様式の違いが、出入口の形式や間どりの違いとなってあらわれる。さらに、構造材料が石であるかレンガあるいは木であるか、そしてそれらの合成の方式と外観がどうであるかについては、建築の物理的な様態や機能を超えるものがある。それこそが一定の文化のもつ「空間象徴」の現象であり、その現象の基底には世界観が内在している [森田 1979]。

この空間象徴の構造を、東南アジアのインド化された多くの国々において相当程度に影響を与えたと推定されるところの、ヒンドゥ建築書 *vāstuśāstra* のいくつかに基づいて解

* 明石工業高等専門学校; Akashi Technological College, Akashi 674, Japan

表1 ヒンドゥーおよび東南アジアの寸法体系

Mānasāra (5-6C. AD.)						Kautilya (ca. 312-300 BC.)						バリ	タイ	
寸法名称	語義	倍数	ang.	cm.	用途	寸法名称	語義	倍数	ang.	cm.	用途			
paramānu	原子			7.30E-6		paramānavah	極微塵			5.84E-5				
ratha-dhūli	車塵	8para.		5.84E-5		ratha-dhūli?	車塵	8para.		4.67E-4				
vālāgra	髮端	8rath.		4.67E-4		likshā	蟻	8rath.		3.74E-3				
likshā	虱卵	8vālā.		3.74E-3		yūka	中虱	8liks.		2.99E-2				
yūka	虱	8liks.		2.99E-2		yava	大麦粒	8yūka		2.38E-1				
yava	大麦粒	8yūka		2.38E-1		aṅgula	指節	8yava		11.905				
aṅgula	小指節	6yava		11.429		dhanurgraha		4aṅg.		47.62				
//	中 //	7yava		11.667		dhanurmushti		8aṅg.		815.24				
//	大 //	8yava		11.905		vitasti	掌長	12aṅg.		1222.86				
vitasti	掌長	12aṅg.		1222.86		chhāyāpaurusha		//	//	//				
kishku	小腕尺	2vita.		2445.72	乗物, 家具, すべて	śama, śala		14aṅg.		1426.67				
prājapatya	小腕尺	2vita. +1aṅg.		2547.63	館	parirapa, pada		//	//	//				
dhanurmushti	中 //	26aṅg.		2649.53	殿堂	aratni	腕尺	2vita.		2445.72				
dhanurgraha	大 //	27aṅg.		2751.44	村	prājapatya-hasta		//	//	//				
						hasta	腕尺	2vita. +1dhg.		2853.34	秤, 枿, 牧場	asta	sok	50cm.
						kishku, kamsa		//	2vita. +1dhm.	3260.96				
						kishku		//	42aṅg.	4280.01				
						hasta		//	54aṅg.	54102.87	森林			
						vyāma	(身長)	84aṅg.		84160.02	繩, 穴深	depa		
daṇḍa	尋	4dhm.	104	198.12		daṇḍa, dhanus	尋	4arat.		96182.88		depa- asta- musti	wah	2m.
						nālika, paurusha		//	//	//				
						gārhapatyadhanus		108aṅg.		108205.74	大工物差, 道路	depaasta		
						paurusha		//	//	//	城壁, 祭壇			
						daṇḍa	尋	6kams.		192365.76				
raju	繩	8daṇḍ.	832	1584.96		raju	繩	10daṇḍ.		9601828.8	正方形			
						parideśa		2rajj.		19203657.6	//		sen	40m.
						nivartana		3rajj.		28805486.4				
						bāhu	尋	3rajj. +2daṇḍ.		30725852.2				
						goruta, krośa	牛声	1000dha.		960001828.8m.				
						yojana	由旬	4goru.		384E37315.2m.				
													yoht	16km.

明し、再構築してみたい。

その一つ *Mānasāra Vāstuśāstra* (マーナサーラ建築書) [Acharya 1934; 野口 1982] によれば、人間も建築も、そして村も町もすべて宇宙の構成要素であって、それらに一貫する、第1の構成原理は「寸法 māna」である。この寸法は、のちに述べるように神の子孫である聖人あるいは建築家 *sthapati* の身体が基準となっているらしいが、極微から極大までの、意味をもった一連の不連続の数詞によって構成されている。すなわち寸法の原単位は、「聖者の眼にはみえる極微塵 *paramānu*」である。その大きさは数列から逆算して約7ミクロンと試算される。そしてその8倍が車塵 *ratha-dhūli*、さらに8倍数をくりかえして指節 *aṅgula* (約19.1ミリメートル) となる。12 *aṅgulas* は掌長 *vitasti* (22.9センチメートル)、その2倍すなわち24 *aṅgulas* が小腕尺 *kishku* (45.7センチメートル) となる。

また、別に26 *aṅgulas* をもって中腕尺 *dhanurmushti*、27 *aṅgulas* を大腕尺 *dhanurgraha* という。中腕尺の4倍すなわち104 *aṅgulas* は尋 *daṇḍa* (198.1センチメートル) である。これらはまさしく身体の寸法であり、そして表1にみるように、それぞれ家具、館、殿堂、村や町の構成基準寸法として使い分けられることになる。『マーナサーラ』にみえる寸法は縄 *rajju* (約15.8メートル) で終わりであるが、グプタ王朝、紀元前300年ごろの *Kautilya Arthaśāstra* (カウティルヤ実利論) [Sharmasastri 1956] の寸法体系に関する記述を同様に表化し、多少の相違を認めるとすれば、実は先の『マーナサーラ』の方が、後者あるいはそれと同等の技術書から実用寸法を抜粋し、さらにそれに極微にはじまる寸法を付加して体系化しているらしいことが判明する。

しかし、『マーナサーラ』あるいは同等の技術教本が明らかに身体寸法の実用的部分を

重視しているのは、その役割から当然であるといえる。上述の表にみるように『カウティルヤ』の方は『マーナサーラ』に比べてはるかに寸法体系が完備し、その最大寸法は由旬 *yojana* (約7.3-7.5キロメートル) となる。さらにこの *yojana* は「無数由旬約 $10^{59} \times (7.3-7.5)$ キロメートル」 [ヴェスバンドゥ 1935] と天文学的寸法に拡大されることになる。こうして極微にはじまる寸法の体系は極大に至り、その過程で人体やもろもろの存在物を一貫して記述しながら、完結する。このように現象世界に存在するものにはすべて寸法による記述性が付与され、逆に寸法体系は無から有を存在せしめようとする場合の構成原理となるのである。

ここで、上述の表にはバリとタイで採集された若干の寸法が付記してあるが、先の『カウティルヤ』と『マーナサーラ』の関係でみたと同様に、これらの相互の関連が、寸法名称および絶対寸法を通じて判明することも興味深い事実である。すなわち、バリの寸法の若干は、インドの『マーナサーラ』よりは『カウティルヤ』の寸法の抽出ではないか。また、バリの寸法は、マジヤパイトの *Nāgarakṛtāgama* (ナーガラクルターガマ) [Pigeaud 1960] に散見される寸法名称にはほぼ一致している。しかし、タイの寸法は、これらとは相当異なる体系をなす。こうして、寸法の系統を通じて、文化伝播の系と時間の系を設定することも、ある程度可能になるかもしれない。

こうした寸法の系統は現実の建築遺構を観察すると、そこに明らかにたちあらわれてくる。一例をあげれば、ジャワで8世紀後半から9世紀はじめにかけて建設されたボロブドゥールは、一定の寸法の厚味をもった切石を水平な層状に積みあげて構成されている [千原 1982]。この水平な切石の高さ、すなわち厚味は、他の寸法も散見されるけれども、22.9センチメートルすなわち掌長 *vitasti* が庄

倒的に多いようである。この vitasti は必ずしもバリーないしは『ナーガラクルターガマ』にはみられない。また、mushti の2倍ともややずれが生じるらしい。一方、ポロブドゥールより早期に建設されたと推定されるディエン高原のヒンドゥ教寺院群には、拳 dhanurmushti あるいは mushti (12-13センチメートル) がほとんどである。そして、この dhanurmushti はバリーとインドの『カウティルヤ』とはみられるが、『マーナサーラ』には同じ長さではあられない。こうして、先にもふれたディエンとポロブドゥールの系統の違いが実証できることになる。

次に、第2の構成原理である図形について『マーナサーラ』の内容をみよう。以下に述べる図形は建築や村、町が形成される時の、主に平面の形式をあらわしている。規則的な図形の代表例として正三角形、正方形、長方形、正多角形、円形などがある。これらはすべて建築の平面形式としてもあらわれる。そのうちで正方形についてみると、表2のように、32種類の、両辺を等分割してできるマンダラ mandala となる。こうして分割された各区画には特定の神や人間の場が与えられ、建築物が形成される。いわゆるグリッド・プランニング(またはマンダラ)である。

実用的には、単一区画の Sakala Mandala が拝殿や献火場に用いられ、 $2 \times 2 = 4$ 区画の Paiśācha (あるいは Pechaka) Mandala が公衆の礼拝場および浴場に用いられ、さらに $8 \times 8 = 64$ 区画の Chaṇḍita (あるいは Mandūka かえる型) Mandala, $9 \times 9 = 81$ 区画の Paramaśāyika Mandala などが好んで用いられるようである。

ここでもヒンドゥの建築構成原理としてのマンダラ mandala は、その語意の通り、それ自体が合成された世界像であり、その世界像には32階梯があり、その中からどれかの階梯が恣意的に選ばれる図式である。どのマン

表2 『マーナサーラ』による32種のマンダラ

番 区画数	名 称	用 途
(1)	1 Sakala	(1) 拝殿, 献火, 聖人の食堂, 祖先拜 (sraddha など)
(2)	4 Paiśācha, Pechaka	
(3)	9 Pīṭha	
(4)	16 Mahāpīṭha	(2) 公衆の礼拝と浴場
(5)	25 Upapīṭha	
(6)	36 Ugrapīṭha	
(7)	49 Sthaṇḍila	
(8)	64 Chaṇḍita (Mandūka)	
(9)	81 Paramaśāyika	
(10)	100 Asana	
(11)	121 Sthāniya	
(12)	144 Deśya	
(13)	169 Ubhaya-chaṇḍita	
(14)	196 Bhadra	
(15)	225 Mahāsana	
(16)	256 Padma-garbha	
(17)	289 Tri-yuta	
(18)	324 Karṇāśṭaka	
(19)	361 Gaṇita	
(20)	400 Sūrya-viśālaka	
(21)	441 Susāmhita	
(22)	484 Supratikānta	
(23)	529 Viśālaka	
(24)	576 Vipra-garbha	
(25)	625 Vivesa	
(26)	676 Vipula-bhoga	
(27)	729 Vipra-kānta	
(28)	784 Viśālāksha	
(29)	841 Vipra-bhakti	
(30)	900 Viśveśa-sāra	
(31)	961 Išvara-kānta	
(32)	1024 Chanra-kānta	

ダラを選ぼうとも、それは眼前の現象を超えて、それぞれの区画に神々のいます、そしてわれわれがその区画をみる時それらの神を思念することのできる、宇宙の像を象徴していることに変わりはない。このような宇宙像としてのマンダラが、建築や村や町の構成原理ともなっているのである。同様にヒンドゥの建築書は、必ず建築を属、種に分ける。『マー

ナサーラ』によれば、12属、98種もの建築があり、そして第3の構成原理ともいえる、基壇や柱などの建築部位の「形」と「寸法階梯」の合成が、それぞれの名称とともに指定される。柱の形についてみると、角柱は *Brahmā-kānta*、五角柱は *Śiva-kānta*、六角柱は *Skanda-kānta*、八角柱は *Vishnu-kānta*、十六角柱と円柱は *Rudra-kānta* と命名される。

構成原理の第4は、木、石、レンガ、金属の建築材料をどう選び、それら単一種または複数種の材料をどう合成するかに関連する。総じて、すべての材料は建築と同様に宇宙の現象であり、そこに材料入手と加工の手を加えることによる秩序の改変はあり得ない。

注意深い自然現象の観察と材料採集の一例を、木材の採集にとってみよう。『マーナサーラ』によれば、木材の採集は南北（冬夏至、または *Māgha*（第1、2月）からの4カ月間に行うべきである。採集に当たり、建築家 *sthapati* は大工 *sthapaka* を伴って黒分の吉日に森に向かう。斧、棍棒、刀その他の道具をもち、*raksha-sutra* に守られて。建築家は前夜から断食をし、翌朝森へ向かう道中には吉兆をみななければならない。「森に着くと快く、涼しい影をなげかける樹をみつけてしばし休み、吉なる鳥の鳴声を聞く。鳥の声を南に聞くは大吉、東は吉、北は凶。その場合は3匹の羊を犠牲棒の上において、*asuras*, *rākshasas*, *bhūtas*, *pisāchas*, *charagī*, *didārī*, *pāparākshasī* など（悪霊）に捧げる。Indraにはじまり *Iśana* に終わる8方位の神々に捧げる。*Mukhaya*, *Mṛiga*, *Aditi*, *Udita*, *Vitatha*, *Antariksha*, *Bhṛisa*, *Pūsha* と悪霊 (*rākshasas*) には肉と米の供物を捧げ、棟梁 *sthapati* は果、ミルク、米を森の神に、それぞれの名を唱えつつ捧げる。しかるのち禊 (*adhivāsa*) をとり行い祝詞を捧げ、バラモンたちに膳が向けられる。」バラモンは「オム、守護神と *rākshas* と *bhūtas* を崇めまつる」

と唱える。このあと棟梁と施主はともに *Brahmā* に捧げ、施主は献火を行い森の神々を崇める。「棟梁は東または北に向かってたち、斧を洗い、大工とともに施主の手から斧を受けとり、他の者たちと一緒に樹を伐る。」伐られた樹は注意深く加工され、生えていたように建築の中に位置を占める。こうして樹はもとの宇宙にかえる。また、ヒンドゥの建築構成の原理は、宇宙の秩序の構成原理とも理解されるに至る。

III 東南アジアにおける建築と空間象徴の諸相

ヒンドゥの建築構成原理は、古代以来インド文化を移入した東南アジアの各国にも適用されている。しかし、寺院や宮殿の一部分を除けば、東南アジアでは上述のように構成的でも、複雑でもなく、むしろ原理そのものは単純で、流動的、土俗的である。

中心、2方向あるいは4方位を強調する世界像、これが東南アジアの一つの空間象徴構造の特徴である。逆にいえば、境界あるいは構築的全体の構造が不明確であることにつながる。一例をジャワの王朝期にみたい。すでに報告したように [野口 1969]、北プラオサン寺院の空間構造は次のようである。すなわち、その平面計画でみる限り、ヒンドゥの建築構成に倣っている。しかし、各祠堂に据えられた寄進者の小碑文からは、西側の正面を王族に、そして4ないし8方向をそれぞれの方向にある村の首長に当てられていることが判明した。このことは「5村連合 *montjo pato*」(外の四つの意味で、中心と四方を意味する)、すなわち村落レベルの籍地を五分し、一つを村長に付与し、残りを4人の筆頭吏員 (同じく *montjo pato*) に与える王朝期の伝統にもあらわれている。この伝統は中東部ジャワで中心と周囲の4村、都合五つの村

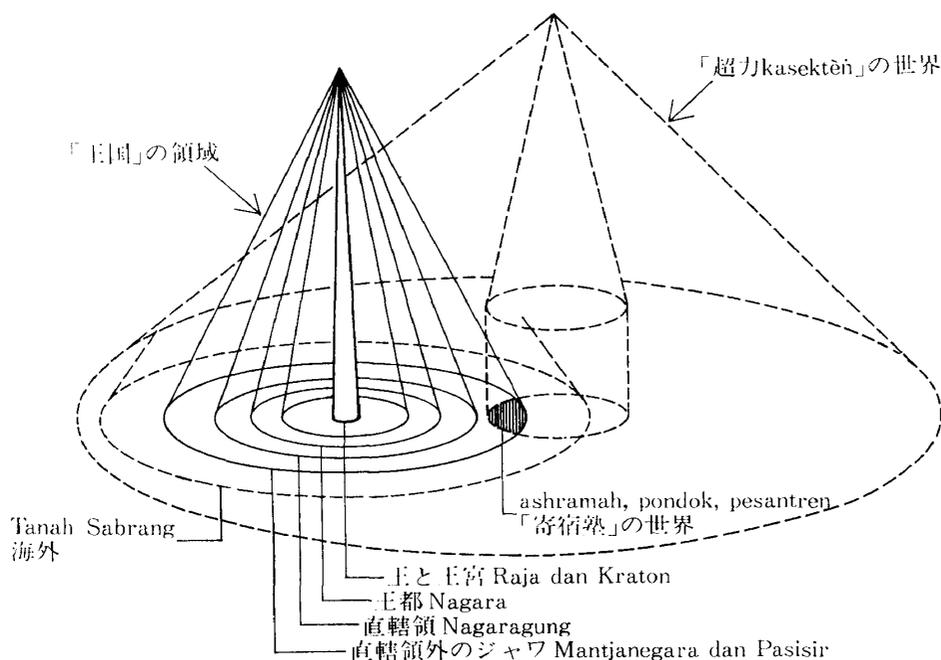


図1 ジャワの伝統的王国と世界像

が順次市場を回りもちで開設し、5日を1週間とする暦法にも伝えられている。

中心と周辺の構造認識はまた、ジャワの伝統的王国像にもあらわれている(図1)。すなわち図示のように、王国の中心には王と王宮 Raja dan Kraton があり、その周辺を王都 Nagara と直轄領 Nagaragung がとりまく。しかし、この図式はむしろルースな同心円または共軸円錐の構造であり、周縁すなわち直轄領外のジャワ Mantjanegara dan Pasisir および海外 Tanah Sabrang との境界は不明確である。しかもこの構造の柔軟性には、人力を超越した「超力、霊力 kasektèn」が重複し、参与する。すなわち王国の中心である王と王宮もこの超力 kasektèn の移動によって容易に移動し、構造秩序も崩壊するに至るのである。¹⁾

しかし、現実の王国は物理的な王宮の建築や王都とともに、もっと定着しやすい。同様

1) この点に関して、土屋健治、永積昭両氏の著作に負うところ大である。

に、王国の中心であり、大地あるいは宇宙に定着する空間象徴の例を、タイの国礎柱 Lak Muang にもみることができる。²⁾

かかる中心と周辺との構造関係は、ボロブドゥールやプランバナンの仏教ヒンドゥ教寺院のように、構造体の中心部はヒンドゥ建築の構成と同様に確固たるものにみえながら、その周辺部分の構成

が不明確であることも無関係ではない。そして、このことは住居と屋敷地との関係、あるいは東南アジア島嶼部のイスラム教モスクの囲いおよび建築にさえ反映されているのである。

それでは、このようにいわば相反する空間象徴の原理の共存関係をどう理解すべきかの問題が残る。それは相克的関係よりは、影絵のごとくに二重写しであり、その像の上に全体の合成がなされている。しかも、外部からどんな構造が移入されようと、いったんはその映像に重複して写し出され、この過程で外来の構造は内部化され、さらに内部合成という形成作用が生起している。このように理解すべきではなからうか。

IV 地域開発に向けられる建築と歴史的環境

以上のように、空間象徴の形成は過去から

2) Lak Muang に関しては、吉川利治氏の論著に詳しい。

の遺産でもある。いまここで地域の開発という今日的現実の目標を措定して、この空間象徴について再考してみたい。

地域開発の目標とするところは、物質的生産もあろうが、究極的には、ある空間を共有する集団が集団としてと同時に個人個人として、自己を自己たらしめようとする極めて抽象的、精神的なもの、いわゆる自己実現 self-realization の過程であると理解してみよう。

もう一方で、建築文化財および歴史的環境は、歴史の多重価値を内含しながらも、現に生き続ける遺産として、相対的に認識することも可能である。宮殿や寺院を必ずしも王朝期の支配の遺構とのみみないで、歴史物としても、宗教あるいは美の対象、あるいはまた国際交流の証しとしてもみることができるようである。しかし、建築や記念物が、動かし難い支配の構造を、時には人間の意思に反してまでも厳然として眼の前に象徴し続ける反面のあることも、ここで忘れてはならない。建築および空間は、そのうえでわれわれの営為の生起する「場」なのである。この「場」はわれわれの行動を規定すると同時に、イメージをも重複させる世界である。そこに「時間性」という、もう一つの重要な要素が介在する。時間には、時計で計測できる「クロノス的」時間と、生きられた「カイロスの」時間とがある。後者の時間は自己自身も身につけているのであるが、歴史的環境や文化財はそれ自体でこのような生きられた時間性を顕示し得る。

また、われわれはその時間を自己内在化することもできる。一例として千年の大木を眼前にした時、われわれはその大木の千年を一瞬にして自己の内部に受けとめ、感動する。もし集団が、固有の文化のごとき一つの歴史的価値に共通して信頼をおくとすれば、眼前の文化財や歴史的環境を介在させることによって、それを一層確実に、しかも有効に共感

し伝達できる〔西川 1973〕ことは、一般に認識しているところである。今世紀はじめにインドネシアの民族主義者タマンシスワの運動家たちが、固有の文化、固有の社会構造を探究した、その集会のたびごとに、ボロブドゥールやシンゴサリ、モジョケルトなどの遺跡を訪れたのは、かかる事情を反映しているともなせよう。また今日、東南アジア諸国で進行しつつある、遺跡や都市遺構の保存と整備の公的事業は、以上のような、建築の空間象徴の機能に立脚していると理解してよからう。

参 考 文 献

- Acharya, P. K. 1934. *Architecture of Mānasāra*. London: Oxford University Press. Translated from Sanskrit Manuscript.
- Begde, P. V. 1980. *Ancient and Mediaeval Town-planning in India*. Delhi: Sagar Publications.
- Casparis, J. G. de. 1956. *Prasasti Indonesia*. Bandung: Masa Baru.
- 千原大五郎. 1982. 『東南アジアのヒンドゥー仏教建築』東京：鹿島出版会.
- JICA. 1979. *Republic of Indonesia, Borobudur Prambanan National Archaeological Parks*. Tokyo.
- 森田慶一. 1979. 『ウィトルーウィウス建築書』東京：東海大学出版会.
- 西川幸治. 1973. 『都市の思想——保存修景計画への指標』東京：日本放送出版協会.
- 野口英雄. 1969. 「中部ジャワの仏教遺跡——北プラオサンの方位について——」『東南アジア研究』6(4)：339-358.
- . 1982. 「マーナサーラにみるインドの建築寸法」『日本建築学会近畿支部報告論文集』
- Pigeaud, T. G. Th. 1960. *Java in the 14th Century, A Study in Cultural History*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Sharmasāstry, R. 1956. *Kautilya's Arthaśāstra*. Mysore: Sri Raghuvēer Printing Press. Translated from Sanskrit Manuscript.
- 土屋健治. 1982. 『インドネシア民族主義研究——タマン・シスワの成立と展開』東京：創文社.
- ヴァスバンドゥ. 1935. 「阿毘達磨俱舍論」『国訳一切経』西 義雄(訳). 東京：大東出版社. (原著 Vasbandhu. Abhidharmakosa-sastra.)